時局と子供

神戸幼稚園　小林良子

○

年少組の朱實ちやんにはお父さんがない、もう三年程前に戰死なさつた。

昨年の七月に、園兒が家庭から有合せのものを一品づゝ持ちより慰問袋を作つた。その時に朱實ちやんが、「あたしのお父ちやんにも送つてね」と言つた。

「朱實ちやんのお父さん、何處へ行つていらつしやるの」

「支那」

「お父さんね、支那で何をしていらつしやるの」

「支那で、あたしの知らんまに栗食べておなかが痛くなつたのや」と答へた。幼ないけれども仲々聰明な子供であるのに、家庭で教へられたものかと不思議に思つた。

この朱實ちやんが、秋の運動會の頃に、靖國神社に合祀されるお父さんに逢ふ爲上京した。子供達も淋しがつたし、私達も何か歸りを待ちわびた。

二週間程たつて歸つて來た朱實ちやんは、「先生、あたしのお父ちやんは死んぢつたの、そして神さんになつとつたの」と言つた。其れ以後私はその話に觸れないし、朱實ちやんも口にしない。

この子供が大きくなつた時に、靖國の對面を朧げながら思ひ出して、感激を新にする日もあるのであらうか。

○

お辨當をいたゞきながら、男の子供の間で、桃太郎と金太郎とどちらが強いかといふ事について、議論が始まつた。

「金太郎の方が力が強いから強い」といふ子供が三四人、「桃太郎の方が強い、鬼が家來だから」といふ者が二人程、他の子供達は默つてゐる。そのうちに、

「そんなにえらさうに言ふのやつたら、僕のうちへ來い、日本刀で切腹してやる。（斬つてしまふのつもりである）」

「斬つてもろたら恰度いゝ、死んだら神さんになれるから、神さんになつたらいゝよ。天皇陛下さんでも拜んで下さるから」

「子供が死んだつて、神さんになんかなれへんよ、兵隊さんやつたらなれるけど」

「さうや〳〵　天皇陛下さんの爲に死ぬから神さんになれるんやで」

「さうや〳〵」と異口同音に讃成した。言ひ出した子供も默つて聞いてゐる。

○

西園寺公の國葬の日であつた。朝の集會の時に、園長先生から、國葬の日である事、西園寺公のおえらい事についてお話があつた。

其日の歸りの事である、私は、

「今日はどんな日でした」と尋ねた。四十人の顏がじつと此方を見てゐたが、やがて、

「あのね、西園寺さんのお葬式の日」

「國葬やつたの」等聞えた。

「さうでしたね、西園寺さんはどんな方でした」

「おぢいさんやね」

「えらい〳〵(大變な)おぢいさんやつたの」

「さうね、そしてどんな事なさつたの」

「えらいお仕事をなさつた」

「あのね　天皇陛下のことばつかり思つとつてやつたの」

「忠義な人やつた」

園長先生のお話をよく覺えていらつしたのね、西園寺さんは九十二までも長生きをなさつて　天皇陛下の御爲を思つて、一生懸命お仕事をなさつた方でしたね、貴方達も大きくなつたら、どんなお仕事でもいゝのよ、御商賣しても、軍人さんになつても、なんでもお國のお役に立つ人になりませうね」と言ひながら、拜む樣な祈る樣な氣持になつた。

○

冬になつて、子供達がオーバーを着る樣になつた。一人の男の子供がダブルボタンのオーバーが嬉しくて、暇さへあれば帽子掛から外づして着てゐた。

或日、いゝ事を思ひ付いた。學生帽を斜にかぶり出來るだけ肩をはつて、右手を斜め上に揚げ、意氣陽々と机の間を縫つて歩いた。他の子供達が「ヒットラー」「ヒットラー」と手を叩き歡聲をあげた。赤い頰を輝かし、口を尖らして歩いてゐる彼は、今、世紀の英雄だ。

○

一人の男の子供が、朝部屋へ入るとすぐ、

「燃ゆる大空、凄いぜ、先生みた、明日見ていらつしやいね、阪急で」

「あのな、頭刈つてたら、集れいふてね、そいで半分黑いまゝ走つて行くんやで」

「凄かつたなあ〳〵」とポケットへ手をつゝこんだまゝ、一氣に話した。

そのうちに、

「燃ゆる大空、氣流だ雲だ、
揚るぞ、馳るぞ、はやての如く、
爆音正しく、高度を持して、
輝く翼よ、光と競へ、
航空日本、空征く我等」
が男の子供の好きな歌になつた。
それから大分たつた或日の事である、男の子供達が部屋の隅に集つて大評定を始めてゐる。何時もリーダーになる子供が「燃ゆる大空」を見て來たのである。
A「あのな〳〵飛行機がな」
B「あの中尉、とう〳〵死んだな」
C「急降下ブルンブウン〳〵」と飛行機になつて飛んでゐる。
集團的獨語といふのであらう。
そのうちに、
「先生お花頂戴」、「先生僕も」、「僕も」と手に手に少し凋んだ花を持つて大潮の引く樣に庭へ飛出して行つた。
「これで、お墓つくろうな、あの中尉のな」と砂場へ飛込んで、賑やかな共同作業が始まつた。お互に、「そんなことしたらあかん」と言ひながら、砂を四角に盛上げて、その上に花を飾つた。
「まあ、きれいに出來たわね」
「うゝん、先生、もつと〳〵きれいやつたで」
誰かゞ、「拜まふな」と言ひ出して順々に、にこ〳〵しながら拜んだ。そして又何處かへ散つて行つてしまつた。

○

此頃、「西住戰車長ごつこ」といふ遊びが隨分長くつゞいてゐる。暫らく皆で戰爭ごつこをして後に、西住大尉になつた子供が、「僕がクリークの深さを測つて來ます」と言つて棒切を手に用心深く這出して行く。少し這つては止り又進み、お終に、「やられた」と叫んで倒れる。他の子供達は飛び出て來て、「しつかりしろ」と云ひながら圓陣を作り、そのまゝ抱へて陣地まで運び込み、そして又戰爭ごつこである。
時には、「君、支那の女の子になれ」と女の子供も仲間に入ることもある。